

たからものは皆で守る——くろうと 素人も力しろうとを合わせて——

八戸学院大学短期大学部客員教授 三村 三千代

I はじめに

皆様、こんにちは。三村三千代と申します。今日はこのフォーラムが、Web開催ということで開催されましたこと、皆様のご苦勞があったと思います。関係なされた皆様方に御礼申し上げたいと思いません。そしてまた、私もここに参加させていただくこと、御礼申し上げます。と思います。

渡辺麻里子先生のご講演、すごく刺激的な、そして楽しいお話を伺いました。今日の話だけでなく、これまでの3冊にわたる報告書を読ませていただいて、本当に知的な刺激を受けている私でございます。今日参加させていただくことについては、ちよつと私のような者が参加してもいいのかということについては、渡辺先生に申し上げました。というのは、今日の話題になっている深浦円覚寺の古典籍、大変貴重なものに関しては本当に素人の私ですし、経歴を見ていただくと、玄人っぽい経歴なんです。実は素人であるという自分の気持ちがございますので、このアカデミックなフォーラムに私が何を話すことができるのだろうかと思いつつながら、でも、一県民としての参加でいいですよと渡辺先生が言ってくださったので、その立場で参加させていただこうと思つて参りました。今日は渡辺先生と、そしてこのプロジェクトに関わつていらっしゃる皆さんにエールを送るような気持ちで参りました。

今日の私のタイトルは「たからものは皆で守る——素人も素人も力を合わせて——」ということにさせていただきました。私は素人ですが、

でも、素人も大事なんだ、素人が実は大事なんだという話をさせていただきたいと思つています。

まずは先ほどの渡辺先生のお話にもありましたけれども、このプロジェクトがきっかけとなって、円覚寺の真言、修験聖教類及び文書の青森県重宝指定、本当におめでとうございます。私も新聞紙上で発表されたのを見て、本当にうれしく思いました。青森県の宝物が、今までもちゃんと存在していたけれども、それが評価されて、そして重宝に指定されたということ、本当にうれしいと思つています。

県の重宝指定に関しては、先ほどの渡辺先生のお話にもありましたように、中世の写本が、特に青森県内では非常に貴重であるということ、そして、県内で書かれたものもあるのですが、本山である醍醐寺の関わりというのが非常にあります。醍醐寺との関係、そしてまた、津軽地方での関係、いろんな関係をその資料から知ることができる。特に修験道についての資料は貴重であるというような様々な資料の貴重さを知ることができて、非常にまた改めて感動したわけです。実は、大変個人的な話になるのですが、私は学生時代に『古事記』を勉強しております、『古事記』を勉強する者にとつて一番大事なのは『真福寺本古事記』というものなのでございます。先ほどの渡辺先生のお話にも出てまいりました、これからお話しいただく阿部先生の専門の分野でございますが、名古屋の真福寺に伝わる貴重な写本、国宝『真福寺本古事記』ということを学生時代、知つてはいたのですが、今回、深浦円覚寺のプロジェクトで様々勉強させていただいた中で、ああ、中世の写本というのがこれほど貴重なものなのかということを生々しく改めて感じることもできた、そんな機会にもなつた。これは個人的に非常に大きな喜びであつたことでございます。

このプロジェクトの研究成果、いろいろ読ませていただくことで、自分なりのこれからの興味の持ち方なども私の中で動き出している部分は

あるかなと思うのですが、今日の時間にはちょっと間に合いませんので、今日のお話は、円覚寺さんからは離れたお話からさせていただきますこうと思います。

Ⅱ 北海道・北東北の縄文遺跡群の世界文化遺産登録

この話題も今年の青森県民にとっては大変うれしいことだったんですが、北海道・北東北の縄文遺跡群が世界文化遺産に登録されたという、今年7月27日に正式登録となったものです。この話題について、ちょっとお話をさせていただきたいと思います。

縄文時代というのは、今から約1万5000年前〜2400年前、1万年以上にわたってつづいた時代とされています。そして、今回の遺跡群が世界文化遺産に登録された理由は、集落を作って定住して、そして、そこで共同体が様々な展開をしていった、その過程を示すものであるということと、縄文時代における精神文化が非常に高度なものであったということを示す遺跡群であるということが世界文化遺産への登録理由になったと伺っています。

北海道に6遺跡、青森県に8遺跡、岩手県に1遺跡、そして、秋田県に2遺跡、すべてで17遺跡がまとまって世界遺産に登録されました。当初は、縄文遺跡に関しては、なぜ北海道と北東北なのかという議論があったと聞いております。縄文遺跡は、実は日本中にあるんです。それが何で北海道・北東北だけ世界遺産に登録しなきゃいけないのだという議論があったと聞いています。これが世界遺産に登録されたという事情については、最初は大変に大きな発見があった三内丸山遺跡を登録できないかというところから運動が始まったと聞いておりますが、それだけでは非常に弱い。もうちょっと縄文時代全体を見通すようなストーリーが考えられないかといったときに、一つにはこの17遺跡をたどっていくと、1万年以上にわたる縄文時代がどのように展開していっ

たのか、どのように推移していったのかというのが17遺跡を見通すことで分かる。そのストーリー性が高く評価されたということ。

もう一つは、この遺跡群が実によく保存されている。保存されているということは、行政だけではなくて市民レベルでの活躍というものも非常に大きかったというところも言われているところなのです。つまり、今日の話題でいえば、素人の力も結構大きかったのではないかと思います。

【添付資料①】

これは文化庁のホームページから引っ張ってきたのですが、17遺跡は、このように分布しております。今日私がいる弘前市には大森勝山遺跡というのがございます。私、実は残念ながら大森勝山遺跡は行ったことがないのですが、岩木山をバックに非常に広々としたところにある遺跡で、縄文人も岩木山を見ながら精神性豊かな暮らしをしていたんじゃないかなということも言われております。

【添付資料②】

そして、世界遺産登録に向けては青森市にある三内丸山遺跡の大きな発見がきっかけとなりました。これは復元されたものですが、六本柱の建物です。大型掘立柱建物と云われています。直径が1メートルもあるような大きな栗の木が6本、4.2mの等間隔



で並んでいた。おそらく建造物であつたらうということで、今、こういう復元の形になっています。これも特徴的なものですけれども、奥のほうに見えるのが大型竪穴建物と言われる、長さが32メートル、幅10メートルぐらいある非常に大きな住居でございます。住居といっても1人、2人が住むようなものではないので、三内丸山の人たちが集まつたところでしょう。集まつて何をしたかまでは分かりませんが、共同作業をしたのか、あるいは、何かお祭りのようなことをしたのか、宗教的な行事をしたのか、そういうところが想像される建物でございます。

三内丸山から様々な出土品が出ておりますけれども、その出土品から縄文時代の交流も見えてまいります。例えば、翡翠は青森県内では採れません。調べたところ、新潟県糸魚川地方に産する翡翠であるということが分かったようですが、実は北陸地方には神話が残っております。



『古事記』などに出てまいりますけれども、大国主命という大変魅力的な男性の神様と又ナカワヒメというお姫様の恋愛の神話があるのですが、この「ぬなかわ」という名前は「ぬ」の川という意味で、「ぬ」というのは「玉・宝石」という意味、おそらく翡翠がそのあたりで産されたというので、貴重な玉の川が「ぬなかわ」、そして、そこのお姫様が又ナカワヒメと言われております。大国主命というのは出雲にお鎮まりになった神様なので、出雲と北陸地方の関係が古代にあったのではないかと、という神話上の関連も想像できますし、また、翡翠というものが北陸地方から青森にやってきたということで、これは実際にそういう交流があつたのだと、縄文時代に日本海、船による交流があつたのだということがよく分かる場合がございます。

円覚寺の様々な貴重な資料も、おそらく日本海を使ったのでしょうか、陸路の可能性もあつたでしょうけれども、日本海、水運ということも古くからの交流として改めて考えられるところかと思えます。

翡翠のほかに黒曜石もあります。北海道、あるいは長野県のあたりで採れる黒曜石が三内丸山にやってきている。あと、天然アスファルトも青森県では生産されないものが秋田等から伝わってきているということが出土品から分かるそうでございます。

それを世界遺産に登録しようという運動が起こりました。2014年に先ほどの六本柱の跡をはじめ、大規模な集落跡が発掘されて、そこから市民レベルで縄文アドバイザーともいえる熱気があふれ、そして、三内丸山応援隊、三内丸山情報発信の会、三内丸山ボランティアガイドなどなど、素人と言える人たちが縄文遺跡を発信するために頑張ったのです。そして三内丸山だけではなく、ほかの遺跡でも同様に市民レベルで、住民レベルで様々な活動がされたということが、素人の力が世界遺産登録への後押しになったのではないかと思われるところなのでございます。

三内丸山は大変に有名ですが、もう一つご紹介したいのが、是川石器

時代遺跡です。これは八戸市にございます。青森県の東南のあたりです。是川石器時代遺跡にも、いわゆる素人と言っている方々が、関係していたということです。八戸では有名な話なのですが、是川遺跡と泉山兄弟というお話です。

泉山家というのは八戸の資産家でございます。今も残っております。八戸セメントを創業したとか、あるいは、泉山銀行という銀行を始めた、青森銀行に今、統合されていっているようにございますが、そのように大変有名な八戸の資産家でございます。その泉山家に泉山岩次郎(いわしじろう)という方と泉山斐次郎(あやしじろう)という方がいらつしやいました。これが泉山兄弟と言われる方ですが、実はこの2人、実の兄弟ではございませんで、それぞれ別な家から泉山家に婿入りした婿養子になったお二人だそうでございます。選ばれて婿養子になったということですから、それぞれに才覚のある立派な方々だったんだらうと思えますが、この兄弟が是川遺跡の調査、記録、保存をして専門家、研究者への協力などをしてきたのです。きっかけは、泉山家の私有地の中に是川遺跡の一部分があったそうでございます。弟、斐次郎がそこに住んで、庭というか畑というか、そこを耕して、ここに木でも植えようかといったときに、その土からいろいろなものが出てくる。最初は、今から木を植えようとするのに邪魔だなどと思ったそうでございますが、なんだかすごく立派なものが次々に出てきて、丸いお皿の完全なものが出てきたのに大変感動して、これはきちんとして調査しなければならぬと思った斐次郎が中心になって調査を進めました。実は、斐次郎の実家のお兄さん、実のお兄さんがそういう考古学的な興味を持っていた方だそうで、その関係もあつたらしいのですが、斐次郎さんが中心になって調査を進め、岩次郎さんは兄として資金的な援助をするという協力関係のもと、大変すぐれた調査をなさった兄弟でいらつしやいます。

最終的には5,000点ぐらいの出土品があつたと言われるのです

が、それを散逸することなくすべて八戸市に寄贈なさつたということですが、実は、大正9年(1920年)からそういう発掘調査を始めて、いろいろんな時代があつて、特に、第二次世界大戦後には縄文遺跡から出たものの美術的価値みたいなのが大変に高騰した時期があつて、国内、国外、外国からもぜひ譲ってほしいというような依頼があつたそうなんです。今のお金にすれば億単位の依頼、譲ってほしいというような申し入れがあつたそうですが、それをすべて断つて、地元のお宝なのだからという思いで、すべて八戸市に寄贈した。それが今、是川縄文館(八戸市の施設です)に、保存されています。

【添付資料③】

これは去年、2020年夏の是川縄文館の企画展なのですが、1920年から発掘調査を始めてちょうど100年目ということで、「泉山兄弟と「是川遺跡」という特別展が開かれました。チラシに載っている写真の人物が泉山兄弟です。左側の方がお兄さんの岩次郎さんで、右側の方が斐次郎さん、それぞれ発掘した土器をお持ちですけれども、とても大切に、我

是川遺跡発掘100周年記念
泉山兄弟と是川遺跡
7-18 @ 9-6
是川縄文館 企画展 2020
100th Anniversary of the Isikawa Yama-no-kyō Excavation
2020年7月18日(土)～9月6日(日)
会場：是川縄文館(八戸市)
入場料：大人500円、小人250円、小学生以下無料
お問い合わせ：0178-42-1111(平日9:00～17:00)
HP: <http://www.isikawayama-no-kyo.jp/>

「是川遺跡」は、縄文時代を代表する重要な遺跡です。2020年からは、発掘100周年を記念して、特別展を開催いたします。本展覧会では、これまで発見された貴重な出土品を多数展示いたします。是非、お越しください。

企画展「泉山兄弟と是川遺跡」の開催がきっかけで、2020年からは、是川遺跡の発掘から100周年にあたります。本展覧会ではこれまでの調査結果を、泉山兄弟をはじめ、是川遺跡にかかわりの深い人びとを交え、これまでの調査の調査や発掘の歴史を振り返ります。

企画展「泉山兄弟と是川遺跡」の開催がきっかけで、2020年からは、是川遺跡の発掘から100周年にあたります。本展覧会ではこれまでの調査結果を、泉山兄弟をはじめ、是川遺跡にかかわりの深い人びとを交え、これまでの調査の調査や発掘の歴史を振り返ります。

企画展「泉山兄弟と是川遺跡」の開催がきっかけで、2020年からは、是川遺跡の発掘から100周年にあたります。本展覧会ではこれまでの調査結果を、泉山兄弟をはじめ、是川遺跡にかかわりの深い人びとを交え、これまでの調査の調査や発掘の歴史を振り返ります。

が子を抱くような気持ちで触っていらっしやるのが分かるような気がいたします。

是川遺跡にもこのように、素人と行ってしまっただけかどうかも分かりませんが、一般の方が興味を持って、そして、自分にできることをし続けていった。それが今の世界遺産登録にももちろんつながっていると思われるのでございます。自分たちだけでやっていたわけではなくて、専門家の助言を仰ぎ、専門家に協力してということももちろんなさっております。

Ⅲ 玄人と素人

そんな中で、今日の題ですが、「玄人と素人」ということについて、ちよつと考えてみました。「玄人」という言葉を使いましたが、一般的には「専門家」とか「研究者」とかと呼ばれる方々だと思えます。それに対して「素人」という方々がおります。実は、何かに対するアプローチの仕方として、玄人、素人だけではなくて、全く無関心な人もいるのではないかと思うのです。むしろいろんな問題に対して無関心だという方がほとんどなのではないでしょうか。その無関心な方が何らかのきっかけで素人になるということなのではないか。そして最初は素人であった方が玄人になっていくということなんじゃないかと思っております。ですが、素人とは一体何だろう。ダジャレみたいなのですが、私なりに考えた素人というのは、「知ろうとする人」なのではないかと思うのです。無関心ではないのです。何かこの問題について、この事柄について知りたい、もうちよつと何かを自分なりに近づいていきたい、そういう思いを持った方が「素人」なのではないか。

では、「玄人」とは何か。玄人でいらっしやる方々も皆さん、最初は素人であったと思えます。ただし、それが玄人になるためには、その「苦勞を厭わない人」ではないかなと思えます。あるいは、苦勞を苦勞

と思わない人が玄人になれるのかなと。本当に語呂合わせみたいな話ですが、そんなことを考えました。

こういうことを考えて自分のことを振り返ってみると、私自身は全てにおいて、まだまだ素人だなと思うところ大なのですが、それはこれらの私に、自分自身に対する課題として残しておきたいと思えます。

そして、深浦円覚寺プロジェクトに関してなのですが、無関心な人が素人になるためには、何らかのきっかけが必要だと思います。この深浦円覚寺の文書調査プロジェクトというのはすばらしいきっかけになったと思います。深浦の町民、あるいは高校生、また、大学生ももちろんですけれども、ひよつとしたらまだ無関心だったかもしれない人を巻き込んでの活動であったところに大きな意義があると思います。それは玄人としての渡辺麻里子先生によるきっかけづくりです。先ほどのご講演を拝聴しても思うんですが、渡辺先生、お上手ですね。無関心な人、あるいは、ちよつと引込み思案な方を巻き込んでいく、そのパワーというのはすばらしいものがあると感じました。そんな渡辺先生に乘せられていったらなんですけれども、知ろうという気持ちを持った方々が自分にできることをして、このプロジェクトに参加する、そういう青森モデルと言っていたいておりますけれども、すばらしいプロジェクトだったなと思うところでございます。

そして、素人が大事なのだと思います。素人が増えれば裾野が広がります。裾野が広がれば素人の皆さんが作ってくれた成果によって玄人の皆さん、専門家の皆さんがそれを研究することによって成果の山はどんどん高くなっていくことができるのだと思います。

そしてまた、つながることの大切さということもプロジェクトで教えていただきました。渡辺先生から始まったプロジェクトだと思っております。渡辺先生からいるんなところにつながっている。そもそもは弘前大学と深浦町とのつながりから始まったのかと思えますが、円覚寺さん、

京都の醍醐寺さん、深浦町の皆様、弘前大学では原先生たち、渡辺先生が大正大学に移られた後にもこのプロジェクトを引き継いで、原先生はじめ皆さんで引き継いでいかれるというふうに向ってありますけれども、そして学生の皆様、そして、フォーラムに来ていただいた永浦先生、そして、今日もお話を伺うことができる阿部先生、そして、名古屋大学とのつながり、そしてまた、今日のお話はおそらく奥会津へのつながりなどということもつながっていくことかと思えます。末木先生、そしてまた、渡辺先生が異動なさった大正大学へのつながり、様々なつながりが、先ほどの山でいえば裾野の広い、そして、高い山につながっていくのだと思っております。

そもそも円覚寺の貴重な資料というのがどのように集まって来たかというところ、円覚寺の尊岸和尚、尊海和尚、義観和尚、ほかの和尚様もでしようけれども、自ら様々なつながりを求めて行動なさっていました。醍醐寺を尋ねたり、あるいは、修験道を伝えるという意味でも貴重なことだと思っております。海浦義観和尚は大峰山の入峰修行という厳しい修行もなさった。様々な体験、様々なつながりを通して、円覚寺に集まってきた資料です。それがまた今、新たなつながりを持つことで新たな価値を持つようとしている、そんなふうにごプロジェクトを拝見させていただきます。

「たからものは皆で守る」ということですが、深浦円覚寺の古文書は貴重な宝物である。県の重宝指定もそうですけれども、その貴重さというものがこのプロジェクトによって一般の方々にも段々に理解されつつあるということだと思います。ただ、この宝物は紙という儂いものでできっております。みんなで守ろうとしなければ、ただの紙になってしまいます。紙資料というのは、人によってはものすごく貴重なものになります。知らなければただの紙きれとなってしまうもので、知らない人がこんなもの、ただの紙だといって処分してしまうということも世の中たく

さん行われているのではないかと思います。それを防ぐためには、少しでも知った人、そして、知ろうとする人、いわゆる「素人」が増えていってほしい。これは渡辺先生の願いと同じです。円覚寺の資料についてももちろんそうなのですが、まだ知られていない宝物がひよっとしたらこの津軽のどこかのお蔵に、あるいは、物置に隠れているかもしれない。そういうものが発見されたら、またすばらしいことだなど。それをみんなで守っていくという思いでこのプロジェクトの先を私も一緒に見つめさせていただきたいと思っております。

IV 終わりに

準備してきたのは一応終わるのですが、円覚寺資料を報告書で見せていただいて、私自身がこれから何か素人として知っていきたくと思うことは、円覚寺さんの資料とは直接には関係ないかもしれないですが、仏教、特に密教というのと和歌との関係、これは先学の方たちがたくさん研究なさって成果を出していらっしゃる分野だとは思いますが、私自身も密教と和歌の関係について、考えてみたいと思っております。

おまけとして出しましたけれども、百人一首の中に前大僧正行尊という立派なお坊さんの歌がございます。これは大峰山、修験道の聖地と言ってもいいのでしょうか、その大峰山の山中で修業をしていたときに思いもかけず桜の花が咲いていたのを見て詠んだ歌、「もろともに あはれと思へ 山桜 花より外に 知る人もなし」。たった一人の厳しい修行をしていた行尊が、たまたま出逢った山桜、山桜もたった一人でそこに咲いている。私もたった一人でこの厳しい修行をしている。お互いにお互いのことを「あはれ」、しみじみと愛しく思おうではないか。おまえは私しか知らないのだ、そして、私のことは山桜、おまえしか知らないのだというような意味の歌でございますが、この歌を何となくは理解したつもりでいたのですが、円覚寺さんの様々な資料を見て、改めて

しみじみとこの歌の意義を考えたいなと思つてるところでございます。

さらに言えば、西行法師という出家した歌人がおりますけれども、この西行の歌も仏教、あるいは密教と深く関連しているということ、これをもう少し自分なりに勉強していきたいなど。様々なきっかけを、私なりにきっかけをいただいたこのプロジェクトでございました。

今日のお話は円覚寺さんのプロジェクトには直接の関係はなかったところも多かったかとは思いますが、私自身が非常にすばらしい知的刺激をいただいたということをご報告させていただこうと思えます。ご清聴ありがとうございました。